

「最近、読みたくてたまらない本が見つからないんだよな」というあなた。「ちょっと人と違う本を読んでみたい」というあなた。ぜひ、ご覧ください。東大教官が薦めるこの一冊。秋の夜長はこれらの本で決まりです。

山脇直司教授推薦

〈日本人〉の境界

小熊英二・著(新曜社)

私が専門とする社会思想に提出された博士論文であり、史・公共哲学の観点からみり、近年まれに見る「重厚な、今年の秋の読書の一押し長大さ」と「面白さ」と「真しは、何といても小熊英二の『日本人の境界』」を兼ね備えた力作と「二氏の『日本人の境界』」を兼ね備えた力作と「二氏の『日本人の境界』」を兼ね備えた力作と「二氏の『日本人の境界』」を兼ね備えた力作と

（新曜社）だろ。序と結論を合わせて二五の章から成り、七七二頁にも及ぶこの大著、実は昨年十一月に本学大学院総合文化研究科

差別を批判しながら、他方でその対抗措置として、沖縄、アイヌ、台湾、朝鮮を、国民国家日本の中にいかに組み込んでいったかという問題であり、その模様を著者は、当時の政治家と知識人の言説や、実際に施行された法律や国民教育に着目して、冷徹に描き出す。著者によれば、そもそも「日本人」という概念は、不動の

したりしてきた。この事実を知ることをなくして、日本の近・現代史を語ることはできない。こう述べる本書の前作『単一民族神話の起源』(新曜社 一九九五年、なおこれは氏の修士論文である)同様、インターナショナルなレヴェルで注目を浴び、末永く参照されていく榮譽を担うであろう。

変動する〈日本人〉の概念

